

入港

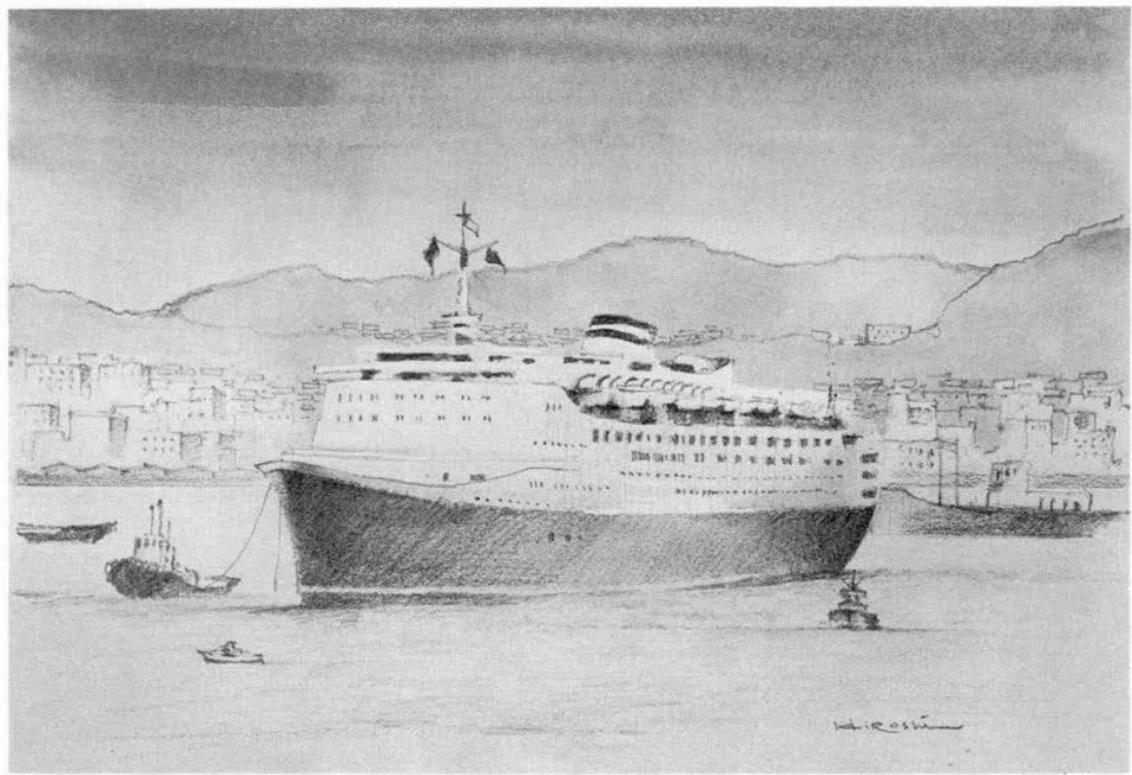
林田 重五郎 〈新聞記者〉
え・松 本 宏

「船はミナトに、陽は西に……」で始まる流行歌が口ずさまれていたころの話である。水上署神戸港を受持つ記者をしていた。

朝五時、トアロードの露地の下宿で、目覚まし時計がなる。壁面全部を船会社のポスターで埋めた四疊半の部屋を飛び出して、一目散にメリケン波止場へ……。その朝入港の船会社のランチを見つけるとホツと一息、五銭のコーヒーと五銭のトースト、二、三銭のバナナをほうばる。時間が来て新聞記者、船舶旅館の案内者ら常連が乗込むとランチは夜明けの港を和田岬沖合へ。外航船は夜間は入港しない、この沖合で日出を待っている。検疫が済むのを待ちかねてランチから入港船のタラップへ、船は静かに閑門を通つて突堤へ、この間の一時間足らずが、海岸記者の仕事の時間である。目星しい来朝者、帰国者をラウンジに招いて話を聞く。チャップリンもその一人だった。

航空機の旅は国内が主で、欧米とは船旅一本。郵船の歐洲メイル箱根丸、諏訪丸、笠崎丸……。それは外国船のラインとともに、欧米文化を日本に運ぶ唯一の道だった。神戸港への昭和九年の入国者は外人だけでも一万六千五百九十二人。

いまこの地位は羽田に移つた。しかし貨物による文化の伝来はやはり神戸が中心である。コンテナー輸送がふえ、突堤が激増して四十年前と入港の表情も大きく変わっているが、文化移入の本質は昔と同じ、入港に興奮と感動がいまも伴う。



摩耶埠頭から

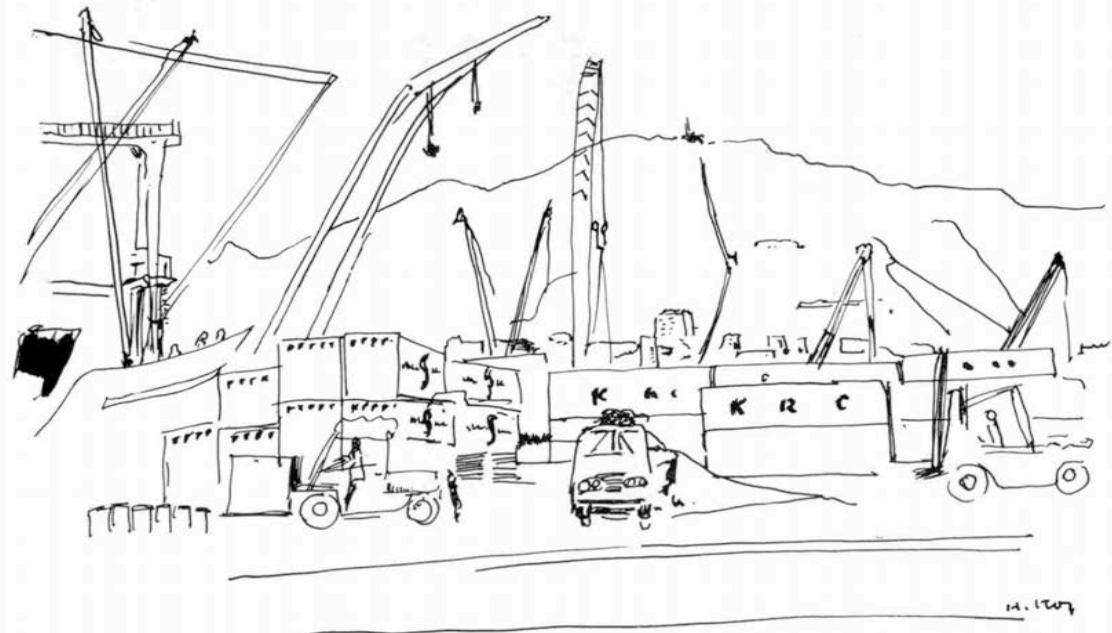
春木 一夫 〔作家〕
え・伊藤 弘之

十年ほど前、摩耶埠頭からヘリコプターに乗ったことがある。ふわり浮いた上空から神戸のまわりを眺めると、また違った景観がある。右手に淡路島、左手に紀伊半島が緑に連なり、海は青く、鏡をくだけたような光の破片がきらめいていた。紀淡海峡を埋めて、瀬戸内海を淡水化したらどうだろうか。そうしたSF的発想も浮かんだ。

山からすべり出した神戸の町は、海へとなだれ込んでいた。建物や土地が白っぽく、空に向かって挑戦しているかのようである。玩具に似た自動車が、蛇行する高速道路を、もつともらしい顔で走っていた。何をそう急ぐのであろうか。死への道を駆進しているのでは……。そんな表情も見かける。

六甲山がナマコのようにうねっていた。不格好な山だが、神戸市民にとつてはオゾンの給源地である。宅地造成で、住宅、学校、団地が建てられているはずである。地上から眺めると、あれほど地肌をむき出しにされ、災害の予告されている山が、ジャングルのように緑一色であるのはどうしたことだろうか。目をこすつたが、山肌は深か深かとして、北京の古都から眺めた景山のような感がする。

機は再びからだを斜めにねじつて、海へと転じる。外国船が赤、白、黒など、とりどりの色で、輝く海にへばりついていた。ボンベイへ、アテネへ、ロンドンへと招くかのようである。十年後になつてようやく私はこの招待に応じた。



海の工場街

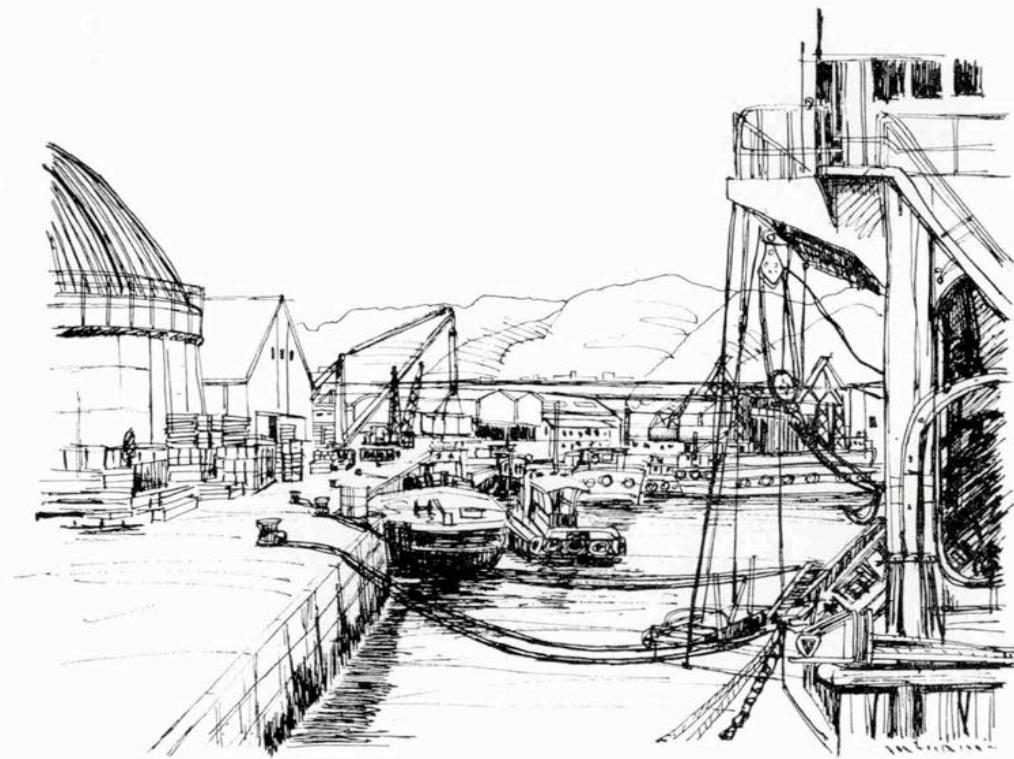
松原 新一（文芸評論家）
え・南 和好

神戸は港町である。造船の町である。

兵庫港のあたりを始まりとして、海に沿つて東へ東へと歩いてみればいい。川崎重工造船所の巨大なクレーンに出会う。そして高浜岸壁を経て、中突堤、メリケン波止場とつづく。そこからさらに、第一突堤、第二突堤、第三突堤、第四突堤、三井棧橋、第五突堤、第六突堤、第七突堤、第八突堤を経て摩耶埠頭へといたるのである。

山を崩しその多量の土砂を運んで海を埋めた。原口前市長のアイデアである。ポートアイランドなる人工の島が出来た。そしてまた、多くの工場が建つた。海岸に沿う町は、多く工場の町となつた。

神戸港めぐりの遊覧船に乗つて、海をめぐるのは、私の楽しみの一つだつた。停泊中の外国の船をながめたり、ドック入りの船で働くかんかん虫の姿を遠くからみつめたりした。今、私は勤め先の学校が鶴甲団地のすぐ近くにあるので、毎日、研究室の窓から神戸の町のたたずまいをみおろすことができる。工場の煙突もクレーンも船も、遠くちいさく目に入る。そこに人々が働いていると思う。だが、空がすつきりと晴れわたり、すみとおつている日の少ないことが、やはりさびしい。埋めたてられた海に工場が建ち並ぶ。そこから、黒々とした煙の帶が、空にはう。六甲の山の上からながめるとき、風景は、灰色のもやがかかつたように、ボウつとかすむのである。



未来へむかう風景

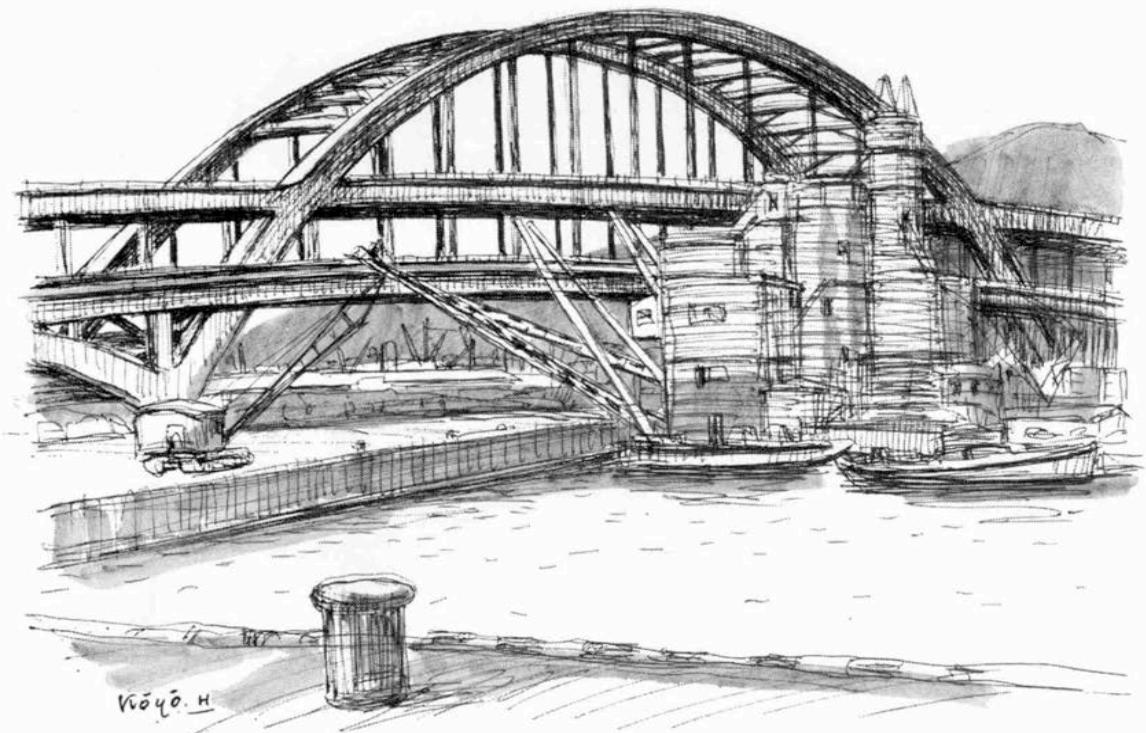
福元 早夫 〔AMAZON 同人〕
え・東浦 好洋

中突堤にたってほぼ南東の方向を眺めると、神戸大橋の巨大なアングルが半月円に弧をえがき冲合いのポートアイランドへと長くのびている。船や港巡りの船がそこをくぐりぬけ、絶え間なく往来する光景は見ていてじつに優雅である。船はささやきかけるよう汽笛を鳴らして海面を滑り、橋ははにかんででもいるかのように真紅のかがやきをいつそうあかくそめる。それでいて悠然と構えているのだ。海と空と太陽と、行き交う船と橋とが、みごとに調和している。港に汽笛がとどろき、波がささやき、橋は無言のことばをもつていて。美しい風景の中に、きびしいロマンをひめている。

三宮駅前からフロワーロードをそぞろに歩き、税関前を通りすぎると第四突堤であり、神戸大橋はその左手にある。少年のころ、この道をよく歩いたものだ。港のもつエキゾチックで甘美なムードに酔い、太陽にかがやくはるか彼方の海をながめて、遠い南九州の故郷を思った。この界隈は青春の原風景である。橋からの眺めは広大な神戸港が一目瞭然であり、港も橋も、現実にむかって強く、確実に生きていることをおしえてくれた。

神戸大橋の紅は、六甲連山だといつそう映える。山麓の濃いグリーン、太陽にかがやいて銀色に光る街並み、そしてブルーの海面に真紅が映え、ポートアイランドへとのびている大橋、鮮かなコントラストだ。

神戸大橋は未来へのかけ橋、未来へむかう新しい風景である。



第四突堤界わい

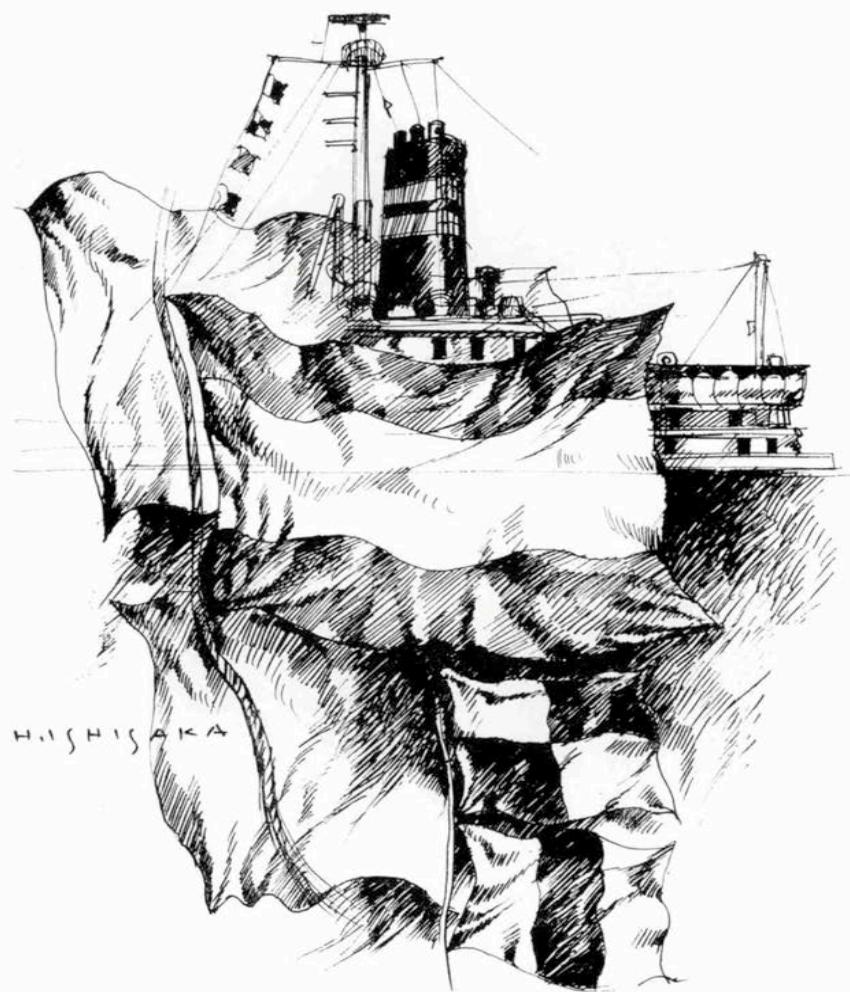
三枝 和子 〈作家〉

え・石阪 春生

四突には、すいぶん御無沙汰だ。すいぶん……。そう、もう六、七年にもなるだろうか。税関の近所までは度々出掛けても、そこから先へ足をのばす機会があまりない。あの広い突堤の、何となくばらばらした人の往来を縫つて、目的もなく先端まで歩いて行つて、もうここから先は海だという場所で、ほんやりと長い時間を立ちつくしている。そんな散歩をよくしたものだつた。

そういうときの自分の精神状態を思い返してみると、あまり憂うつでもない、さりとて浮き浮きしているわけでもない、希望があるわけではない。さりとて絶望しているわけではない、しかしどこかへ逃れ出したくて、何となく呆然としているのだ。オレンジ色の煙突、白いマストの外国船を眺めながら、あれに乗れば此處ではない別の場所へ行けるのだと思っている。私がどこか遠くへ行きたいと願うときは、飛行機で、ではない、汽車で、でもない、船だ。船で、海を越えて遠くへ。それは幼いときからずうつとそだつた……。

父は若い頃、外国航路の船員だつた。十数年くらい前のこと、久し振りに神戸へ立寄り四突を歩いているとオランダ船が入港していた。懐しさのあまり、ふと昔ばなしをすると、見知らぬ船員が親切に船内を案内してくれたと、そのときのスナップを嬉しそうに私に見せた。その父も昨年死んだ。生きていたら、この三月のQ・エリザベスII号を見たいと、寝たきりの床で駄々をこねたことだろう。



メリケン波止場

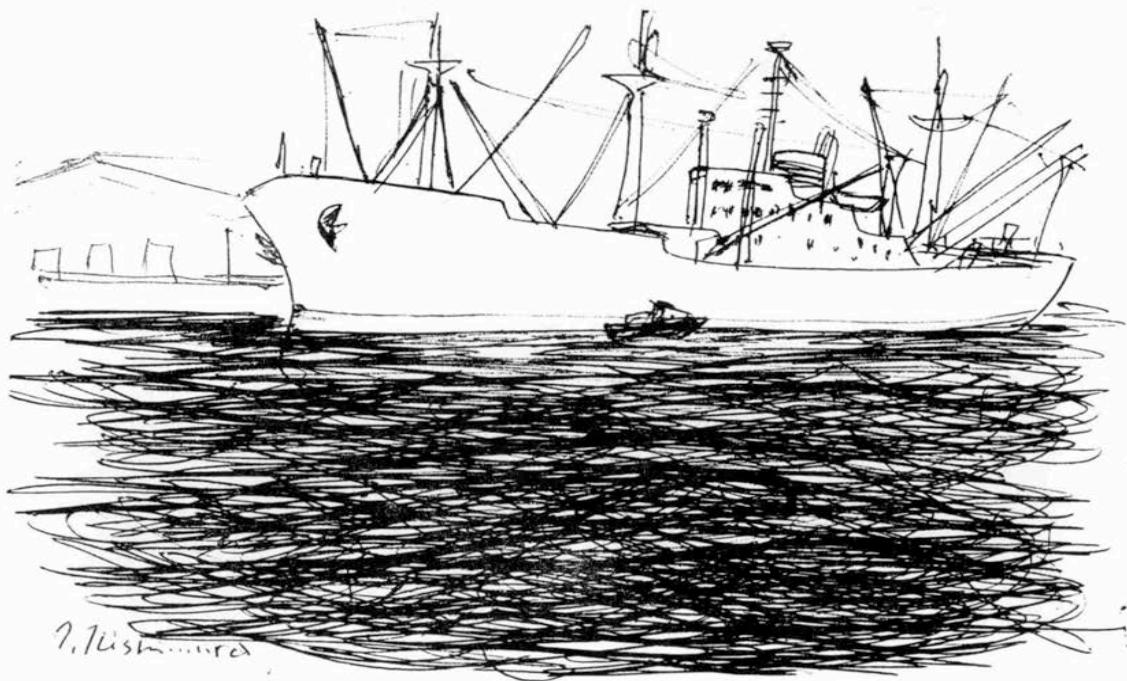
杜山 悠 （作家）

え・西村 功

港に来ると、港だけにしかない音と匂いとに、わけなくまぶれこんでしまう。匂いは、たしかに海の匂いだが、ただの海の匂いでなく『港の中の』海、つまりは生活の海の匂いということであろうか。音にも、働きつつある海の音と……それは実に多種多様な音の束みたいなものだが、それがある。

私は神戸港が好きで、若いころから「海、見にいこか」といって時間がまわらず、港に出た。どこだってかまわないのだが、好きなところといえば、メリケン波止場。正しくいえば万国波止場だけれど、一八六七年の十一月に米国領事館が開館（神戸開港勅許は同年の十二月七日だから、アメリカはそれより先に領事館事務を開始したことになる）して以来、神戸浦の人たちはその浜の波止をメリケン波止場と呼んで来た。公称を万国波止場だといつても神戸っ子どもは、メリケン波止場だと頑固にいい続け、とうとう、メリケン波止場が公称化してしまった。

東の一突と西の中突とにはさまれた格好のメリケン波止場には官営と民営との入りまじった、いわば明治維新時代の遺産的雰囲気があるのが、いくらか皮肉めいたおもしろさを誇り出す。神戸港を異国情緒的に感じる人は、よそから来た人の感覚で、この港に生活した者たちにとつては大そう日本的で神戸人的な港である……と、港で働いている私の知人はいう。私は大急ぎでふんふんと頷く。私にはそういう話もおもしろいのである。



7. Trawlers

舟溜り

安水 稔和 〈詩人〉

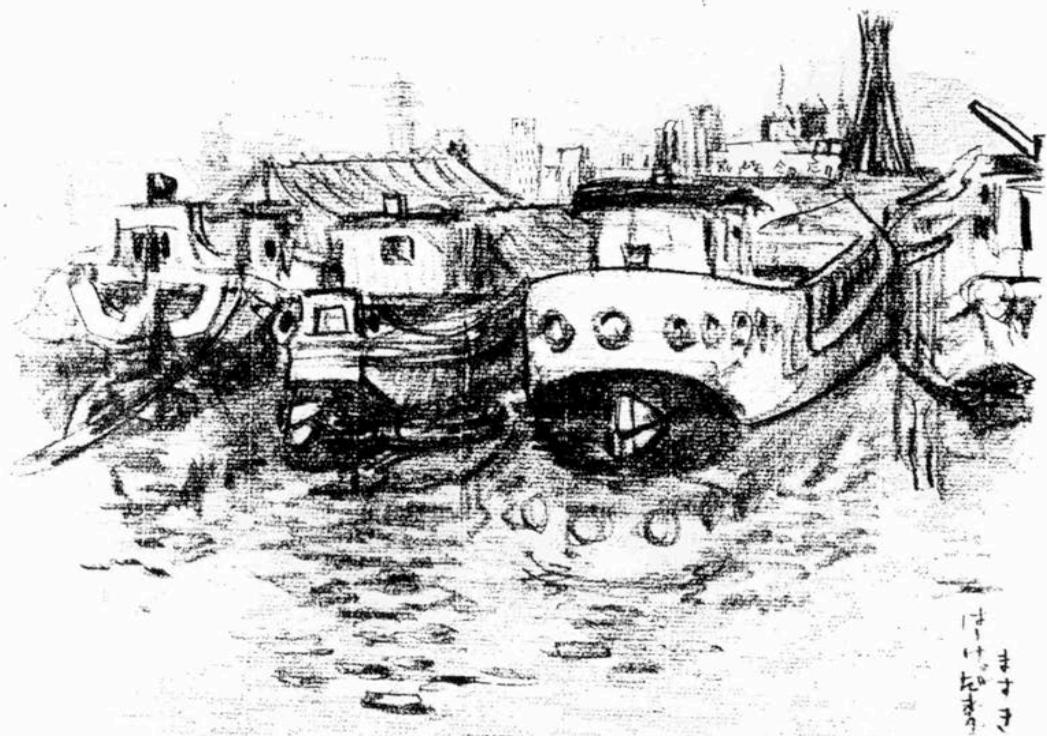
え・小松 益喜

夕暮時。私は岸壁に腰をおろしていた。渡り板のむこうの小舟のうえに七輪としぶうちわを持った男があらわれて魚を焼きはじめた。魚の焼ける匂いが潮の香りと混って、煙といつしょに私のところまで漂ってきた。気がつくとあの船からもこの船からも魚焼く煙が立ちのぼり、暗くなつた港の片隅をおおつていた。私のそばを白い犬が走る。裸足の子供が走る。

夕暮時。私は高い塔の上にいた。港は目の下にあつた。岸壁に大きな船が着く。離れる。豆粒ほどの人の群れが集まつては散る。その反対側の海面に数えきれぬほどたくさんの小指ほどの小船が流れ寄つた木屑かなにかのよう身を寄せあつてゐる。人影はない。木屑のよう潮に身をゆだねてゐる。そのまま闇に沈む。むこうに光の船が入つてきた。とりまく街の灯が息づきはじめた。

夕暮時。港のどこを捜しても、彼等の姿が見当らぬ。見渡せば、人工島の先端にコンテナの山。そのむこうであいかわらず忙しく駆けまわつてゐるタグボート。そのうえを群飛ぶ鷗たち。岸壁は家族連れてにぎわい、巨大な外国船に子供が手を振つてゐる。アカンベしてゐる。夕焼。

久しく私は港へ行つていない。



中突堤の夕暮

和田 悟朗 〈俳人〉

え・松岡 寛一

午後七時五分前。折から『すもと丸』が白い波を蹴立てて入港して来る。港は旅の始まりであり、旅の終りでもある。下船用意の人々は船の片側のデッキに寄り集つて、色とりどりの荷物を握りしめる。

夕陽はすでに遠く鷹取山の向うに落ちていた。

中突堤は途方もなく長い。その先端まで歩く。この先端付近には、刻々と夕闇の深まってゆく静寂の中で、旅に出ない人々が人の気配を断つて静止していた。沖へ向つて停車した何十台とう車はなぜか等間隔に並び、その中に一対ずつの若い男女の影が音もなく碇泊した巨船の瞬く光をいつまでも見つめているようだ。

埠頭の先端は呆気なくただ突如として無愛想に切り断つており、『とまれ、行きどまり、神戸市港湾局』という小さな立札だけが行手を遠慮勝ちに遮る。しかし長い埠頭を歩いて来た足は思わずも停りそうにない。

黒くなつてゆく突端の水をいつまで見ていても仕方がないので、いま来た長い埠頭を戻ることにする。振り返ると、整然と積みあげられたコンテナーの立方体。それを見下ろす鼓形の赤いタワーが自ら光を発す。乗船場の待合所だけがやけに明るく、そこにも旅にゆかぬ人がただ時間を過ごしていた。

旅とは、こうして何かを思いながら時間をじつと見送ることであろうか。

煌煌と背後あり逃れ来て沖

戻らねば心突き出る海の黒



港の背戸

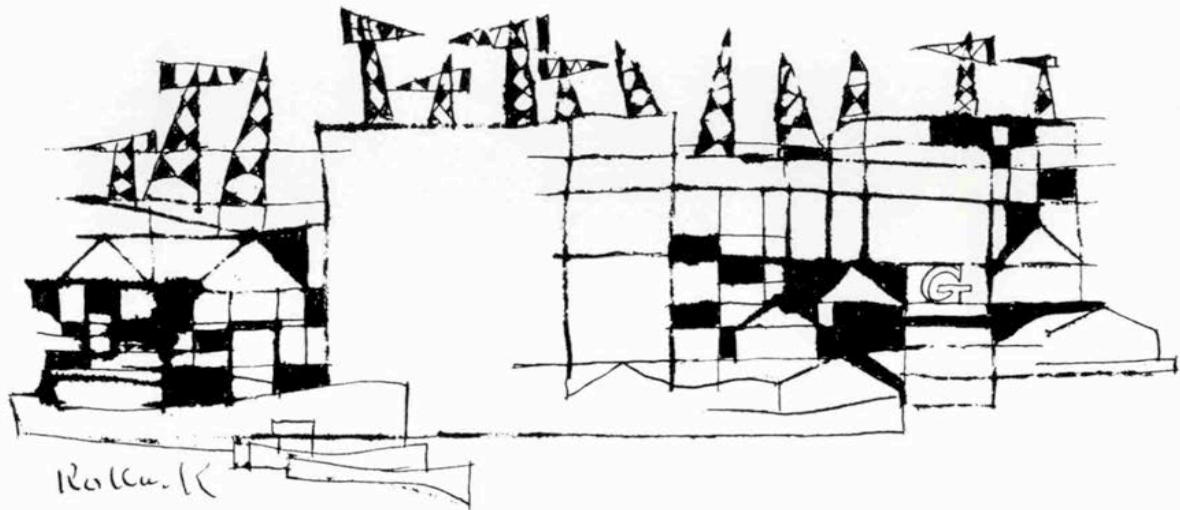
—バナナ埠頭のこと—

中村 隆 〈詩人〉

え・貝原 六一

兵庫突堤の第三突堤はバナナ埠頭と呼ばれている。五月の晴れた朝、港にはホンジュラス船籍の貨物船が、胎内から真青なフィリップ・バナナを筋子のように吐きだしている。12K詰のパッキンケースが次々とフォークリフトで上屋に搬びこまれ、積み上げられ、やがて青酸ガスくん蒸、食品検査、通関検査などがごく短時間に行われる。構内にえもいわれぬ芳香が漂うのは、レモン、オレンジ、グレープフルーツなどの上屋が近接しているからだ。年間バナナ、26万トンレモン、5万6千トン、グレープ、4万9千トン、外にパイン、オレンジなどが、ここに集められる。日本に輸入されるバナナの44%がここ埠頭で扱われるといえ、その膨大な量に誰しも圧倒されるだろう。

川崎重工、三菱重工の二大造船所にはさまれた三本のフォーク型の兵庫突堤は、昔、兵庫の港として三世紀ごろから朝鮮、中国などとの交易の門戸で、「大輪田の泊」「兵庫の津」と呼ばれて繁栄した。だが今では摩耶埠頭、新港突堤、ポートターミナルなどにお株を奪われ、これらを港の表玄関とすれば、兵庫突堤は背戸というところだ。しかし裏口がなければ家は成り立たない。華やかな送迎風景や、エキゾチズムこそないが、ここでは日焼した船員や、作業員のきびきびした作業風景が年中くりひろげられている。「生きる」鼓動が、潮騒のようにわたしたちの胸を打つ。



Rullen. (K)

のびゆく神戸港

— 54 —



● 神戸港の顔 ●

○ 港湾施設

神戸港は新港突堤を中心として、東へ摩耶埠頭、東神戸フェリー埠頭、東部内賀埠頭、西へ中突堤、兵庫突堤、長田港、須磨港と広がっており、東西の全長は約18キロに及ぶ。新港第四突堤には先日のクイーンエリザベ

神港倉庫株式会社

取締役社長 直木 太一郎

神戸市生田区波止場町無番地
電話(078)341-1652代

ス二世号など外国航路の豪華觀光船の着くポートターミナルがあり、神戸大橋によってポートアイランドと結ばれている。また、摩耶埠頭とは摩耶大橋によって結ばれていて、現在東部二工区と六甲アイランドを結ぶ橋が建設中である。

各突堤には市営の上屋、公共の物揚場、民間企業の倉庫などの港湾施設が多数あり、一方、湾内にも浮標、ドルフインなどの大型貨物のけい留施設が多数ある。

これを数字で示せば次のようになる。

| | |
|------------|------------------|
| 。神戸港水面積 | 五六、六八一、〇〇〇平方メートル |
| 。港内 | 三〇、四四一、〇〇〇平方メートル |
| 。港外 | 二六、二四〇、〇〇〇平方メートル |
| 。防波堤延長 | 一、四五六メートル |
| 。船席数(大型船)岸 | 壁 一八〇隻 |
| 。倉庫 | 浮 標 二五隻 |
| 。上屋(市営) | 八九棟 |
| 。物揚場(市営) | 八八社 |
| 。普通倉庫 | 八社 |
| 。サイロ | 八社 |
| 。冷凍倉庫 | 三三社 |
| (私営) | 八九二メートル |

(昭和49年12月現在)

(二) 港勢

神戸港は大型外航船一二〇隻を同時にけい留できる岸壁、日本一の規模をもつ上屋、倉庫などの港湾などの港湾施設をもち、世界一三〇カ国と交易を行い、その年間取扱貨物量は日本一である。

。取扱貨物量 一億四、一五四万トン

。貿易額 四兆三、七九二億トン

。入港船舶数 一二万一、七四三隻 (昭和49年)

(三) 摩耶埠頭

摩耶埠頭は総工費三〇億円をかけて、昭和42年に完

親和海運株式会社

代表取締役 川瀬 五郎

神戸市葺合区磯邊通四丁目二の二〇 (神戸ビル)

電話 (〇七八) 一三一一九二四一

第一工業株式会社

取締役社長 増永光男

本社・神戸市生田区栄町通二丁目

五四 日東ビル 5F
電話 (〇七八) 三九一一〇四四七

大日海運株式会社

取締役社長 石坂展宏

神戸市生田区京町七〇番地
電話 (〇七八) 三三二一三三〇一四七

内外フオワードイング

株式会社

取締役社長 田中忠雄

神戸市生田区新港町三菱新港ビル
電話 (〇七八) 三九一一七五六一四

日神運輸株式会社

取締役社長 小堀忠重

神戸市生田区東町一二二の二
電話 (〇七八) 三九一一六七八一四

成した四突堤、二一バースからなり、とりわけ第四突堤は、わが国初のコンテナーミナルとして使用されている。

神戸港の中心である新港突堤地区とを結ぶ摩耶大橋は総工費七億七、三〇〇万円をかけて昭和41年6月に完成了。橋の全長は五一〇メートル、幅一四メートル、クリアランス二〇メートルの斜張橋（日本初）である。

四新港突堤

新港突堤地区は神戸港の中心であり、西から東へ第一突堤から第八突堤まで一二本の突堤が並んでいる。第五、第八突堤は欧洲航路優先埠頭、また、第七突堤は穀物専用埠頭として使われている。この地区だけで神戸港の全輸出量の三二パーセント、全輸入量の八八パーセントの貨物が取り扱われている。

第四突堤には東洋一の規模を誇る船客待合所「ボートターミナル」がある。ここには「みどりの広場」という公園もあり、外人観光客はもとより神戸市民の誰もが気軽にひとときを楽しめる。また、ターミナルからは神戸大橋を経て世界最大の人工島、ポートアイランドへと続く。神戸大橋はダブルデッキ（二階建）、全長三一九メートルの三径間連続アーチ橋である。

（五）ポートアイランド

ポートアイランドは昭和41年から建設が進められ、総面積四三六万平方メートル（甲子園球場の二二〇倍）の人工島で、コンテナバース九、一般ライナーバース二一、三十隻の大型船がけい留できる埠頭である。コンテナバースは一バースあたり、岸壁三〇〇メートル、コンテナクレーン二基、コンテナヤード約十万平方メートルの規模で建設されている。

また、ここには単なる港湾施設だけでなく、都市機能と港湾機能が結びついた大港湾都市の建設が計画されている。

（以上は神戸市港湾局資料による）

日東運輸株式会社

取締役社長 豊 田 正 徳

神戸市生田区東町一一二東町ビル
電話（〇七八）三九一一七二二一

日本運輸株式会社

取締役社長 牧 野 俊 雄

神戸市生田区海岸通一丁目一〇
電話（〇七八）三九一一七二五一

日本港運株式会社

代表取締役 安 原 重 夫

神戸市生田区海岸通五丁目二六
電話（〇七八）三四一一一九五四

早駒運輸株式会社

社長 渡辺 正 二

神戸市生田区波止場町
中突堤中央ビル

電話（〇七八）三一一一〇一五一代

三輪運輸工業株式会社

取締役社長 三 輪 吉 郎

神戸市葺合区協浜町二丁目
一一番一号

電話（〇七八）二五一五〇〇一

● 福祉時代の幕開けです。あなたも一冊ぜひどうぞ！

世界の福祉施設

欧米の心身障害者を訪ねて

橋本 明著 〈カラー8ページ、本文320ページ、定価 1000円〉
〈社団法人家庭養護促進協会事務局長〉

送料 200円



主な内容

各書店で好評発売中！

振替口座

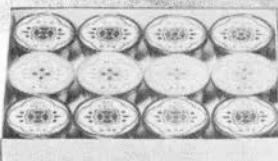
神戸四五九六

- 神戸からシアトルへ
- クライシス・クリニック
- グッドウイル・インダストリーーズ
- フォースターランドベアレント
- 里親発見活動
- ファーストアベニュー・サービスセンター
- ボランティア・ビューロー
- 病院におけるボランティア活動
- レニア・スクール
- 沙漠の中の老人の町
- アメリカのグリープホーム
- 社会福祉とP.R.活動
- ポーライズ・タウン
- パーキンス盲学校
- スポック博士の子供博物館
- アビリティーズ
- ロンドンのバーナードホーム
- 奇蹟の町・ルルドを訪ねて
- コペンハーゲンの老人の町
- ベーテル——西ドイツの障害者の町（ドイツ）
- ヘット・ドルプ——未来を拓くオランダのコロニー（オランダ）

お申込みは月刊「神戸っ子」編集部まで。神戸市生田区東町113の1 大神ビル7F TEL(331)2246

わたしはどれに
しようかな……

風月堂サマーデザートトリオ



ファミリーセット
3缶入 360円
~16缶入 2,000円

プルルンと甘くてなめらか……

プディング

ほのかで上品な小豆のかおり

水羊羹

あまあいみつ入り

マロンドウ

●冷たく冷やして
お召し上り下さい

古い老舗に新しい味覚

神戸
元町



風月堂

本店・神戸元町3 TEL(391)2412

全国有名百貨店・名菓街・のれん街

刀劍 古美術
書画 骨董



船箪笥(江戸期) ￥250,000円

鑑定 買入
研 白鞘 拝 御承処

神戸市生田区元町通6丁目25番地

刀古美術
骨董

元町美術

〒650

TEL078-351-0081